

# 向かい風

樋口明雄



photo by Akio Higuchi

秋は寂しい季節である。それは暑さの夏が過ぎ去って、凛冽な寒さにしばられるだろう冬の到来を意識しながら日々を過ごすのがゆえ。のみならず、われわれ釣り人にとっては、溪流釣りのシーズンが終わって、来春までの、長く重苦しい隠忍の始まりというイメージがある。

今年も峡北漁協の年券を買って、ろくに釣りをしないまま終盤にさしかかった。だから、元を取ろうと、九月の終わりになって何度も同じ渓に通った。

いつもなら、八月が過ぎれば嘘のように観光客の姿が消えるこの渓だが、なぜか今年にかぎって月が変わってもいっこうに人が引かず、静かな川が戻ってきたのは、下旬になってのことだった。釣り人ならぬ観光客のプレッシャーで毛鉤に反応するのは小魚ばかりで、ボウズも多かったが、ようやく二十五センチぐらいの美しい天然の天女魚をかけて満足した。

シーズン終了はクマでシメた。とっておきのボ

いともなら、八月が過ぎれば嘘のように観光客の姿が消えるこの渓だが、なぜか今年にかぎって月が変わってもいっこうに人が引かず、静かな川が戻ってきたのは、下旬になってのことだった。釣り人ならぬ観光客のプレッシャーで毛鉤に反応するのは小魚ばかりで、ボウズも多かったが、ようやく二十五センチぐらいの美しい天然の天女魚をかけて満足した。

シーズン終了はクマでシメた。とっておきのボ

いともなら、八月が過ぎれば嘘のように観光客の姿が消えるこの渓だが、なぜか今年にかぎって月が変わってもいっこうに人が引かず、静かな川が戻ってきたのは、下旬になってのことだった。釣り人ならぬ観光客のプレッシャーで毛鉤に反応するのは小魚ばかりで、ボウズも多かったが、ようやく二十五センチぐらいの美しい天然の天女魚をかけて満足した。

シーズン終了はクマでシメた。とっておきのボ

☆

去年の三・一一。東日本大震災のあと、長編をまったく書けなくなった。

繰り返してテレビで流される津波の災禍。荒れ狂う海に呑み込まれる車や家々。燃え上がる市街地。家族を失い、友を失って心を失ったように

イントに入ってイブニングライズで尺モノをかける予定が、入渓直後の砂地に自分のウェーダーのソールよりも大きな爪の突った足跡を見てしまい、まるつきり川の流れに意識が向かないまま、漫然と遡行しただけで納竿となった。

やれやれ今年の釣りもこれでおしまいかと、フライロッドとリールをロッカーにしまい、スカスカになったフライボックスを哀しげに見ているうち、ふと目を上げると、窓の向こうに蒼茫たる山があった。なぜかそこから視線が離れなかった。山に行きたいなど、漠然と思った。

ひどいスランプだった。

三年にわたって、ずっと温めていた長編小説の企画は、(「狼は眠らない」)に続く、山岳救助隊を題材にした話。舞台は、南アルプスの主峰、北岳にしようと考えていた。それが、なかなか書き出せなかった。執筆をスタートする勇気がなかった。山岳冒険小説を書くとき、いつも架空の山や

憶ける人々。泣き叫ぶ者。東北の海辺の、平和のどかな街に暮らしていたはずの、多くの人間の突然の死がもたらす、さらなる幾多の悲劇。そして——なによりもつらく耐えがたく、憤怒に心をかき乱されたのが原発事故だった。

地球規模の人的災害、未曾有の環境破壊を招いておきながら、誰ひとりとして責任をとらず、それどころかのうのうと自分たちこそが被害者であるかのようにアピールし、あまつさえこの期に及んで、原発政策を押し進め、なおも破壊の道を選んで国民を巻き込もうとする、利権の亡者のようなあの愚かな人間たちに、激しい憎しみを抱き、呪ってすらいいた。

二万近い罪なき人々が不慮の災害で命を落とし、一方で善人の皮を被った悪人がのうのうと生き残るこの現代社会。そんなところに神なんかいないと、本気で思った。それでも神がいるとしたら、地震と津波を起こしてどれだけの人間が死ぬか、あるいは核エネルギーという、世界を終末にいたらしめる切り札を人間に渡して、どれだけの時間で地球が減ぶかを、くすくす笑いながら賭けをし合っているような、そんな悪魔のような神に決まっている。本気でそう思っていた。だからこそ、心底打ちのめされ、絶望した。

人間は信頼し合うべきものであり、ルールにのっとって生きていけば幸せに暮らしていける。子供の頃から漫然と信じていたそんな法則は、大人の社会にはいっさいあり得なかった。正直者は莫迦を見て、真面目を貫けば不幸になる。勧善懲悪や正義は空虚であり、一方で悪ばかりがはびこる。それが現実なのだと思った。

今さらなにをいうと嘯われるかもしれない。しかし、ぼくは心のどこかで、そんな子供じみた希

山域を舞台としてきた。アクション映画のような活劇を繰り広げるには、現実の山だと言っばり違和感がある。日本の高山の多くは国立公園や国定公園に属し、安全管理のために整備されているがゆえ、人跡未踏、秘境などという言葉にふさわしい場所がない。たとえば八ヶ岳の稜線や剣岳の険谷でチャイニーズファイアの殺し屋と自衛隊の特殊部隊がはでな銃撃戦をやったって、ちつとも臨場感がない。

しかし今回は山岳救助の話だ。日常、いつでも起こりうる、リアルな事件の物語なのだ。

ということとは鳥も通わぬ秘境や人跡未踏の地ではなく、ふつうの登山者が多く通うポピュラーな場所であればならぬ。だからといって、一シーズンに三十万人もの登山客がどっと押し寄せる富士山などは論外。それがために、日本第二位の

望を大切に心に抱いていたからこそ、この職業を選んだのだ。純粋でありたいと思っていたから、読者に夢を与える話を書き続けてきたはずだった。

☆

日の当たらない書齋で無為にパソコンに向かい、書けもしない長編に挑んでは、おのれの非力を知って悶々とする。そんな毎日の繰り返しに辟易していた。そして釣りのシーズンは終わり、秋の空の彼方に山々が蒼茫として稜線を連ねていた。

夏霞がすっかりとれて、清涼な空気の中に山巒がくつきりと浮き立ち、すぐ間近に見えるようになった八ヶ岳や南アルプスを眺めていると、山々が声もなく、自分を呼んでいるような気がする。

こつちへおいでと手招きをしている。

やはり登りにいかねばと思った。どうせなら自分が書く小説の舞台、北岳を訪ねてみよう。急登を攀じ、峻峻な尾根をたどって歩き、あの頂上に立ってみよう。そう思った。

決心すると行動は迅速だ。書齋の奥の部屋には、釣りのロッカーやタイイングキットとともに、いつでも登れるようにさまざまな山道具がそろっている。レインウエアはきれいに洗われて撥水処理を施し、山靴は磨き上げられ、ヘッドランプのバッテリーは新調してあり、二種類のコップを重ねた中には、ガスをフル充填したカセットボンベが収まっている。食糧は災害時の非常食を兼ねて、ダンボール箱いっぱいに入れてドライフード類